

# キラキラネームの定義とその構成要素

荻原 祐二 (東京理科大学 教養教育研究院, yogihara@rs.tus.ac.jp)

The definitions of kirakira names and their components

Yuji Ogihara (Institute of Arts and Sciences, Tokyo University of Science, Japan)

## Abstract

The term “kirakira name” has been broadly used in Japan. However, the definition of this term is ambiguous, and what it means is not sufficiently clear. This lack of clarity has caused misunderstandings, insufficient understandings, and unnecessary disputes, which have led to the constriction of appropriate communications, productive discussions, and accumulations of scientific findings, both in society at large and in academic fields. Therefore, this article clarified the definitions of kirakira names and the components of these definitions by exploring representative dictionaries and encyclopedias. Analyses showed that only one component was consistently found among all the definitions: “low-frequency names.” Thus, the broad definition of kirakira name is “low-frequency names.” Moreover, three components were found in not all but some of the definitions: (1) “names that deviate from traditions,” (2) “names that are difficult to read,” and (3) “names that are used in positive or neutral contexts.” Thus, the narrow definition of kirakira name based on these three components is “low-frequency names that deviate from traditions and are difficult to read (when Chinese characters are used), which are used in positive or neutral contexts.” This article is important because it clarifies the definition of kirakira name, which has been ambiguously understood and separately discussed, and it also provides fundamental and sharable definitions of kirakira names. In addition, this article shows that definitions of kirakira names and their components differ even among representative dictionaries and encyclopedias. Therefore, before discussing kirakira names, it is recommended that people explain their intended definition of kirakira names or at least what they mean.

## Key words

kirakira name, name, definition, component, DQN name

## 1. 問題

### 1.1 キラキラネーム

「キラキラネーム」<sup>(1)</sup> (「きらきらネーム」) という言葉が、広く一般的に用いられている。例えば、新聞や雑誌、テレビ、ラジオなどのマスメディアにおいて、毎年発表される新生児の名前ランキングを報道する際や、読者の声を届ける意見欄、人名だけでなく駅名や会社名といった様々な種類の名前について言及される際などにも頻繁に用いられている。

そして、マスメディアだけでなく、Social Networking Service (SNS) やブログ、ニュースサイトなどのインターネットメディアにおいても、キラキラネームという言葉が広く用いられている。例えば、マスメディアにおける例に加えて、事件や事故などで報道された名前や出演者の名前が珍しく変わったものである時や、実際に自分の周囲でそうした名前に出会った時などに、キラキラネームと言及され、その功罪・是非やキラキラネームがもたらす影響などについて、多くの人々によって盛んに議論されている。

さらに、「～さんの赤ちゃんの名前はキラキラネームだ」や「最近の子どもはキラキラネームが多い」、「キラキラネームを正しく読むのは難しい」といった日常会話も、広く一般的に行われている。

本論文を執筆している2022年5月には、戸籍の氏名に

これまでは登録されていなかった読み仮名を新たに含めるために、法務省が戸籍法の改正に向けて中間試案を発表した。これから生まれる新生児だけでなく、戸籍を持つ全国民が氏名の読みを新たに登録することになるため、多くのマスメディアで取り上げられた。戸籍に氏名の読みを含めることを法制化する中で、これまでは全く制限がなかった漢字の読みをどの程度制限すべきかについても議論が行われており、それを「キラキラネームがどこまで許容されるか」という形でマスメディアにこぞって報道された。そして、インターネットメディアにおいても、キラキラネームを制限することの是非や、制限の基準などについて、盛んに議論が行われた。

この動きの中で、法務大臣の諮問機関であり、中間試案を作成した法務省法制審議会戸籍法部会における公的な会議においても、キラキラネームという言葉が用いられている(法務省, 2021; 2022)。法律の改正に関わる議論の中で、ひとつの重要な概念として複数回に渡って言及されていた。

したがって、キラキラネームという言葉は、幅広いメディアで、状況の私的・公的を問わず、広く一般的に用いられていると言える。

### 1.2 定義の曖昧さとその問題点

しかし、キラキラネームとは何かという定義が曖昧であり、具体的に何を意味しているのか明らかでない。おおよそ、「珍しい名前」や「個性的な名前」を意味するものとして使用されているようだが、定義は状況や個人に

よって異なっており、想定している具体的な名前も異なっている。例えば、広く「個性的な名前」として用いている人もいれば、「正しく読むことが難しい珍しい名前」、「人名としては不適切な非常識な珍名」、「当て字を使った非常に個性的な名前」といったニュアンスで用いている人もいる。

このように、キラキラネームの定義が曖昧であることによって、誤解や不要な論争を招いたり、適切なコミュニケーションが阻害されたりしている。<sup>(2)</sup> 例えば、ある人が名前はキラキラ輝く必要はないのにキラキラしているといった揶揄するニュアンスで話題にする。一方でそれを聞いていた人は、キラキラネームを、個性的・独創的で他者に覚えてもらいやすい名前と考えていたために、理解が困難で意思疎通が十分に取れないかもしれない。結果として、マスメディアを通して要らぬ誤解を与えたり、SNS上で不要な論争を生み出したりしている。

したがって、キラキラネームの定義を整理して明確にすることによって、誤解や不要な論争を抑制し、適切なコミュニケーションを促進することは、社会的・実践的に意義がある。

また、このような定義の曖昧さは、世間においてだけでなく、学術界においても共通して見られている。例えば、キラキラネームは、「頻度が特に低く、非常に個性的であり、読むことが特に困難である名前」(荻原, 2015: 178)や「子どもにつけられた名前の中で、常識的には考えられないような名前」(山西他, 2016: 31, 36)などと、それぞれ異なる形で定義されている。松浦・筒井 (2015)によれば、キラキラネームは、「現状では一定の定義はなく『難読名、一風変わった名前』(実用日本語表現辞典)、『珍しい名前、読めない名前』(福田, 2012)、『暴走族のような当て字や漫画・アニメ・ゲームなどのキャラクターからとった当て字の名前のように、読みづらい名前や、常識的に考えがたい言葉を用いた名前』(小林, 2009)等と漠然と理解されている」(p. 137)という。

こうした学術界における定義の曖昧さも、世間と同様に、不十分な理解を招いたり、議論に齟齬を生じさせたりしている。さらに、定義の曖昧さが、研究対象を識別し、明確な定義を他の研究者や研究コミュニティと共有することで科学的知見を蓄積していくことを阻害している。少なくとも今の所、キラキラネームに対する学術研究が多いとは言えない<sup>(3)</sup>理由のひとつは、キラキラネームの定義が曖昧で漠然としているからかもしれない。実際に、キラキラネームと強く関連しているはずの個性的な名前や珍しい名前に対する研究は、日本 (e.g., Ogihara, 2021a; 2022a; Ogihara et al., 2015; Ogihara & Ito, 2022) だけでなく、アメリカ (e.g., Twenge et al., 2010; 2016) やドイツ (e.g., Gerhards & Hackenbroch, 2000)、中国 (Bao et al., 2021; Cai et al., 2018; Ogihara, 2020) など世界中で行われているが、それらを参照しながらキラキラネームについて議論している研究は少ない(例外として、荻原, 2015; Ogihara et al., 2015)。強く関連しているはずの知見を無視して研究を進めることは、非生産的・非効率的である。科学的な

議論を適切かつ滞りなく、生産的・効率的に行うためにも、定義を明確にする必要がある。

したがって、キラキラネームの定義を整理して明確にすることによって、研究対象を識別し、研究コミュニティで共有して科学的知見を蓄積すること、そして不十分な理解や議論の齟齬を生じさせるといった科学コミュニケーションの阻害を抑制することは、学術的・理論的にも意義がある。

### 1.3 本論文

そこで本論文では、キラキラネームを既に定義している辞典・事典を調査し、その定義と定義を構成している要素について整理する。

詳細は後述するが、キラキラネームの類似もしくは同義概念として、「DQN ネーム」<sup>(4)</sup>(「ドクンネーム」「どきゅんネーム」「dqn ネーム」)があり、キラキラネームの定義を明確にするために重要な概念であるため、同時に検討の対象とした。

## 2. 方法

特定の概念に対する定義は一意には決められず、絶対的な正解は存在しない。定義は、あくまで恣意的なものであり、無数に存在しうる。そのため、本論文では一定の基準以上で信頼・実績のある辞典・事典に掲載されている、主要な定義を収集し、その構成概念を検討した。以下に対象とした媒体を示す。

### 2.1 国語辞典

国語辞典として代表的な、新明解(第八版・三省堂)や広辞苑(第七版・岩波書店)、大辞林(第四版デジタル・三省堂)、大辞泉(デジタル・小学館)、日本国語大辞典(第二版・小学館)などを用いて検索を行った。

### 2.2 現代用語辞典・事典

キラキラネームは、古くからある伝統的な言葉ではなく、新しい言葉であるため、定評のある伝統的な国語辞典だけでは十分な情報を得ることは困難かもしれない。そこで、新しい言葉を専門に扱っている現代用語辞典として代表的な、イミダス(集英社)、知恵蔵(朝日新聞社)及び知恵蔵 mini(朝日新聞社)、現代用語の基礎知識(自由国民社)でも検索を行った。

### 2.3 辞典・事典データベース

加えて、より幅広い分野・観点から、より包括的・網羅的な検索を行うため、JapanKnowledge Lib、Weblio、コトバンクの3つの代表的な辞典・事典データベースを用いて検索を行った。これらはそれぞれ、多くの国語辞典や百科事典、専門辞典、雑誌、用語集、図鑑などを包括的・網羅的に検索可能な国内最大級のデータベースである。

### 2.4 専門家による執筆・査読の有無が不明な媒体

上記の辞典・事典は、当該分野の専門家が執筆・査読

を行い編集されているため、内容には一定の妥当性・信頼性がある。本論文では、以下の3つの理由により、専門家による執筆・査読の有無が不明な、実用日本語表現辞典とウィキペディアもひとつの定義の例として利用した。

第1に、DQN ネームはインターネット上で生まれ、より頻繁に用いられているネットスラングであるため、インターネットベースの辞典・事典の方が、その背景や理解に親和的と考えられた。実際、詳細は後述するが、キラキラネームと DQN ネームを弁別し、それぞれが用いられるようになった背景や、使用される文脈・ニュアンスにまで踏み込んで説明をしていたのは、この2つの媒体のみであった。伝統的な辞典・事典は、歴史のある堅い言葉に対しては十分な情報を提供するが、俗語（スラング）や現代用語などの新しい言葉には十分な情報を提供しない場合がある。第2に、ウィキペディアは一般的・世間的にも有名で利用頻度の高いサイトであり、実用日本語表現辞典も、辞典・事典サイトの Weblio に収録され、多くの人々に参照されており、人々の認識や理解、発言に大きな影響を与えていると考えられる。よって、影響力のある参照元を検討することにも一定の意義があった。第3に、詳細は後述するが、国語辞典と現代用語事典・事典、辞典・事典データベースでは参照可能となった定義が多くないため、情報の妥当性・信頼性に注意した上で、議論の対象とした方が生産的であると判断した。

### 3. 結果

#### 3.1 掲載媒体

キラキラネーム（きらきらネーム）及び DQN ネーム（どきゅんネーム・ドキュンネーム・dqn ネーム）が掲載されていた媒体を表1にまとめた。国語辞典では、現代語を重視した編集方針を取っている大辞林、新語への対応に定評のある大辞泉は、これらの用語を収録していた。現代用語事典では、イミダス・知恵蔵 mini はこれらの用語を収録していた。表1に記載のない媒体は、少なくとも2022年5月の段階では、これらの用語を掲載していなかった。

キラキラネーム（きらきらネーム）は6つの媒体で説明されていた。その内4つ（イミダス・知恵蔵 mini・実用日本語表現辞典・ウィキペディア）では「キラキラネーム」、残り2つ（大辞林・大辞泉）では「きらきらネーム」

と記載されていた。

また、DQN ネーム（どきゅんネーム・ドキュンネーム・dqn ネーム）は、4つの媒体で説明されていた。その内3つ（知恵蔵 mini・実用日本語表現辞典・ウィキペディア）では「DQN ネーム」、残りひとつ（大辞泉）では「どきゅんネーム」と記載されていた。

#### 3.2 構成要素

記載のあった各媒体における、キラキラネームの定義とその構成要素を表2にまとめた。記載のあった定義には、以下に示す4つの構成要素が見られた。

##### 3.2.1 頻度が低い名前

全ての媒体に共通して見られた要素は、頻度が低い名前であった。具体的には、「珍名」（知恵蔵 mini・実用日本語表現辞典）や「一風変わった名前」（大辞泉・実用日本語表現辞典）、「奇抜」（ウィキペディア・イミダス）な名前と説明されていた。同様に、「通常の名付けの型にはまらない名前」（大辞林）や「独創的な名前」（イミダス）、「個性的」（イミダス）な名前とされていた。キラキラネームであるためには、低頻度な名前であることが必須の条件であることが明らかとなった。

一方で、頻度の低さの表現には、媒体によって差が見られた。「一風変わった名前」（大辞泉・実用日本語表現辞典）といった、頻度が少し低いといったニュアンスから、「独創的な名前」（イミダス）や「奇抜な名前」（ウィキペディア）、「奇抜さ」（イミダス）のある名前といった、頻度が特に低いといったニュアンスのものまで、違いがあった。

##### 3.2.2 伝統から逸脱した名前

6つの媒体の内、4つの媒体で見られた要素は、伝統から逸脱した名前であった。具体的には、「通常の名付けの型にはまらない名前」（大辞林）、「一般的・伝統的でない漢字の読み方」（大辞泉）をする名前、「社会的に許容されにくい」（知恵蔵 mini）名前、「近年の風潮ともいえる」（実用日本語表現辞典）名前と説明されていた。全てではないが、多くの媒体で、伝統から逸脱した名前であることが、キラキラネームの構成要素として説明されていた。

##### 3.2.3 読むことが難しい名前

6つの媒体の内、3つの媒体で見られた要素は、名前に

表1：記載のあった媒体とその用語

	大辞林	大辞泉	イミダス	知恵蔵 mini	実用日本語表現辞典	ウィキペディア
キラキラネーム	—	—	○	△(DQN ネーム)	○	○
きらきらネーム	○	○	—	—	—	—
DQN ネーム	—	—	—	○	○	△(キラキラネーム)
dqn ネーム	—	—	—	—	—	—
ドキュンネーム	—	—	—	—	—	—
どきゅんネーム	—	○	—	—	—	—

注：○＝見出し語として記載あり、△＝見出し語としては記載がなかったが、括弧内の用語の説明として記載あり。

表2：各媒体におけるキラキラネームの定義とその構成要素

	定義	1. 低頻度	2. 伝統からの逸脱	3. 難読	4. 使用文脈	5. キラキラネーム = DQN ネーム
大辞林	通常の名付けの型にはまらない名前 <sub>1</sub> を俗にいう語。漢字の特異な当て字によるものなど。	「通常の名付けの型にはまらない名前」	「通常の名付けの型にはまらない名前」	—	—	— (言及なし)
大辞泉	俗に、一般的・伝統的でない漢字の読み方 <sub>2</sub> や、人名には合わない単語を用いた、二風変わった名前 <sub>1</sub> のこと。名字についてはいわない。どきゅんネーム <sup>50</sup> 。	「一風変わった名前」	「一般的・伝統的でない漢字の読み方」	「一般的・伝統的でない漢字の読み方」	—	○ (同義)
イミダス	当て字や難読漢字などを使った独創的な名前 <sub>1</sub> のこと。2000年代後半ごろからネット上を中心に使われ始めた呼称。名前に使用できる漢字の種類は、常用漢字と人名用漢字を合わせた2997字だが、その組み合わせ方や読みには制限がない。そのため、外来語に無理やり漢字を当てたものや、架空のキャラクターに由来するものなど、一見して読み方のわからない名前 <sub>3</sub> を子どもにつけるケースが増えている。個性的である <sub>1</sub> 半面、子ども自身は名前を選べないことから、その奇抜さ <sub>1</sub> を批判する声もある。	「独創的な名前」・「個性的である」・「奇抜さ」	—	「一見して読み方のわからない名前」	—	— (言及なし)
知恵蔵 mini (「DQN ネーム」)	社会的に許容されにくい。日本の子どもたちの名のこと。いわゆる珍名 <sub>1</sub> であり、「キラキラネーム」とも呼ばれる <sup>50</sup> 。外国人名、極端な当て字、大げさすぎるものなど、奇異に感じられるものが多い。近年、DQN ネームとされる名前の子が増えている。	「珍名」	「社会的に許容されにくい」	—	—	○ (同義)
実用日本語表現辞典	近年の風潮ともいえる。難読名 <sub>2</sub> 、一風変わった名前 <sub>1</sub> を指す語。いわゆる珍名 <sub>10</sub> 。どちらかと言えば肯定的な意味合いを含めて表現する場合に用いられる <sup>40</sup> 。否定的な、あるいは侮蔑を込めて「DQN ネーム」と呼ばれる場合もある <sup>50</sup> 。	「一風変わった名前」・「珍名」	「近年の風潮ともいえる」	「難読名」	肯定的	× (異義)
ウィキペディア	キラキラネームあるいはDQN ネーム (ドキュンネーム) は、伝統的でない当て字や、外国人名やキャラクター名などを用いた奇抜な名前 <sub>1</sub> の総称。1990年代半ば以降から増加し、命名は親の責任であるためにその者の親の自己満足・教養の無さが露呈する名付けと言われ、2000年代にはインターネットスラングとしてDQN ネームと呼ばれてきたが、2010年代以降にマスメディアでは批判的な意味を薄めた「キラキラネーム」が新たに造語され <sup>51</sup> 、以降のマスメディアではほぼ統一利用されている。	「奇抜な名前」	—	—	中立的	× (異義)

注：定義における下線と下付き文字（著者による）は、該当する構成要素の記述を意味する。知恵蔵 mini では、「DQN ネーム」と「キラキラネーム」を同義としているため、こちらに掲載した。

漢字が用いられている場合に、その漢字を読むことが難しい名前であった。具体的には、「一般的・伝統的でない漢字の読み方」(大辞泉)をする名前、「一見して読み方のわからない名前」(イミダス)、「難読名」(実用日本語表現辞典)と説明されていた。

大辞泉と実用日本語表現辞典では、「一般的・伝統的でない漢字の読み方や、人名には合わない単語を用いた、一風変わった名前」(大辞泉)と「近年の風潮ともいえる難読名、一風変わった名前を指す語」(実用日本語表現辞典)としている通り、名前が漢字以外で構成される場合も考慮されていた。つまり、ひらがなとカタカナで構成されている名前についてもキラキラネームと呼び得ることを示していた。

一方で、イミダスのみが、キラキラネームを漢字で構成された名前に限定して定義していた。具体的には、名前に使用できる漢字の種類と、その漢字の読みには制限がないことを説明した上で、「当て字や難読漢字などを使った独創的な名前」、「外来語に無理やり漢字を当てたものや、架空のキャラクターに由来するものなど、一見して読み方のわからない名前」と定義していた。よって、漢字に珍しい読みを与えている点以外によって低頻度となっている名前は、キラキラネームに該当しないということになる。例えば、漢字の読みは一般的だが人名には合わない単語を用いた名前や、ひらがなやカタカナのみで構成された低頻度の名前は含まれない。この点は、他の5つの媒体の定義とは異なっていた。

### 3.2.4 肯定的または中立的な文脈で用いられる名前

使用文脈を限定する要素が、2つの媒体で見られた。実用日本語表現辞典では、「どちらかと言えば肯定的な意味合いを含めて表現する場合に用いられる。否定的な、あるいは侮蔑を込めて『DQNネーム』と呼ばれる場合もある」としており、肯定的な文脈・ニュアンスで使用されるものをキラキラネームとしていた。

一方、ウィキペディアでは、「命名は親の責任であるためにその者の親の自己満足・教養の無さが露呈する名付けと言われ、2000年代にはインターネットスラングとしてDQNネームと呼ばれてきたが、2010年代以降にマスメディアでは批判的な意味を薄めた『キラキラネーム』が新たに造語され」と説明されており、否定的な文脈・ニュアンスで使用されるDQNネームから、否定的なニュアンスを薄めた中立的な文脈・ニュアンスで用いられる名前としていた。この2つの定義は、少なくとも否定的な文脈で用いられないという点で共通していると言える。

使用される文脈の規定と関連して、イミダスには、「個性的である半面、子ども自身は名前を選べないことから、その奇抜さを批判する声もある」という、キラキラネームに対する肯定的及び否定的評価に関する説明がされていた。同様に、知恵蔵 mini では、「社会的に許容されにくい日本の子どもの名」、「奇異に感じられるものが多い」、「賛否両論が巻き起こっている」といった否定的及び中立的評価が加えられていた。これらの記述はあくまで、キ

ラキラネームが世間一般でどのように評価されているかに関する説明であり、キラキラネームを規定する要素そのものではないと考えられるため、ここでは要素に含めなかった。

### 3.3 DQNネームとの関係

キラキラネームの定義そのものではないが、定義に関連するものとして、キラキラネームをDQNネームと同義の概念とするかどうかの問題がある。それぞれの媒体におけるキラキラネームとDQNネームとの関係を表2にまとめた。

大辞泉と知恵蔵 mini では、キラキラネームとDQNネームを同義と見なしていた。大辞泉では、キラキラネームとは独立した見出し語としてDQNネームの項があるものの、「『どきゅん』は非常識な者を指す俗語」「きらきらネーム」に同じ」と説明されており、同一の概念と見なしていた。知恵蔵 mini では、DQNネームの説明内で、『キラキラネーム』とも呼ばれる」と説明されており、同一の概念と見なしていた。

一方、実用日本語表現辞典では、キラキラネームは「どちらかと言えば肯定的な意味合いを含めて表現する場合に用いられる」としているが、DQNネームを「否定的な、あるいは侮蔑を込めて『DQNネーム』と呼ばれる場合もある」と説明しており、使用する文脈やニュアンスにおいて、キラキラネームとDQNネームを明確に区別していた。実用日本語表現辞典では、DQNネームは独立した見出し語としても説明されており、そこでも「常識的な読み方から逸脱した珍奇な名前、奇を衒ったような難読名、などを侮蔑を込めて呼ぶ言い方。非常識な親(DQN)が浅はかに名づけた名前といったニュアンスがある」と否定的なニュアンスが強調されていた。キラキラネームと同様に、頻度が低い名前(「珍奇な名前」)、伝統から逸脱した名前(「常識的な読み方から逸脱した」・「奇を衒ったような難読名」)、読むことが難しい名前(「常識的な読み方から逸脱した」・「難読名」)である点は共通しているが、その名前だけでなく、その名前を与えた親までも否定・批判するニュアンスが強い点で、キラキラネームとは異なっていた。

さらに、ウィキペディアにおいても、「1990年代半ば以降から増加し、命名は親の責任であるためにその者の親の自己満足・教養の無さが露呈する名付けと言われ、2000年代にはインターネットスラングとしてDQNネームと呼ばれてきたが、2010年代以降にマスメディアでは批判的な意味を薄めた『キラキラネーム』が新たに造語され、以降のマスメディアではほぼ統一利用されている」と説明されており、DQNネームを否定的に、そしてキラキラネームをDQNネームと比べて肯定的、結果としておおよそ中立的なニュアンスとして説明していた。

このように、実用日本語表現辞典とウィキペディアでは、キラキラネームとDQNネームを使用する文脈・ニュアンスによって明らかに弁別して別概念としているため、キラキラネームの定義においても、その使用される文脈

を明確に定めていると言える。

大辞林とイミダスでは、キラキラネームの定義のみが説明されており、DQN ネームの説明及びキラキラネームとの関係については言及されていなかった。

### 3.4 キラキラネームの代表例

キラキラネームを説明する過程で、その代表的な例が挙げられることが多かった。そこで、各媒体におけるキラキラネームの代表例を表3にまとめた。

最も多かった例は、6つの媒体の内4つの媒体で取り上げられた、当て字を用いた名前であった。次いで、6つの媒体の内2つの媒体で取り上げられた、特別な読み方をする名前、架空のキャラクターの名前、外国人名であった。その他にも、人名には合わない単語を用いた名前や、おおげさすぎる名前が挙げられていた。全ての媒体で共通して挙げられた例はなかったが、これらがキラキラネームの代表的な例として、辞典・事典には掲載されていた。

本論文では、キラキラネームとは何かを概念的に説明している定義と、キラキラネームの代表例は区別した。ここでは、「～など」、「～などを用いた」と説明されている場合は、他概念との弁別をしているというよりも、定義に当てはまる具体例を挙げることで、読み手の理解を促進しているため、定義そのものではなく代表例とした。例えば、知恵蔵 mini では、「外国人名、極端な当て字、大げさすぎるものなど、奇異に感じられるものが多い」と説明されていた。「外国人名、極端な当て字、大げさすぎるもの」が、「奇異に感じられるものが多い」という部分の理解を促進する例となっているため、定義ではなく代表例とした。一方で、大辞泉では、「一般的・伝統的でない漢字の読み方や、人名には合わない単語を用いた、一風変わった名前のこと」とあり、ここでの「一般的・伝統的でない漢字の読み方や、人名には合わない単語を用いた」は、他の名前との概念的な違いを直接説明しているため、代表例ではなく、定義とした。

## 4. 考察

キラキラネームの定義が曖昧であることが、世間でも学術界においても誤解のないコミュニケーションや生産的な議論を妨げている。そこで本論文では、キラキラネームの定義とその構成要素について、主要な辞典・事典を用いて検討し、明確化した。

### 4.1 キラキラネームの広義

掲載が確認された6つの定義の内、全てに一貫して見られた要素は、「頻度が低い名前」であった。「珍しく」、「一風変わった」、「奇抜」な名前であることがキラキラネームの本質的な意味と考えられる。また、他には全ての定義に一貫して見られた要素がなかったことから、この頻度の低い名前が、キラキラネームの広義と言える。実際に、マスメディアやインターネットメディアを見ていると、この広義として利用されていることが多いようである。<sup>5)</sup>

企業が公開している、新生児に与えられた人気の名前

ランキングに入っている名前に対して、キラキラネームだと言及するような報道や発言も散見されるが、その年に生まれた新生児の多くに見られる名前は低頻度の珍しい名前とは言えないため、本定義に基づけば、キラキラネームにはあてはまらないということになる。

また、掲載が確認された6つの定義の内、複数の定義に共通する要素はいくつか見られたにもかかわらず、全てに一貫した要素がひとつだけであったことは、少なくとも現在の所、この概念が曖昧に定義されて用いられていることを示しているとも言える。

### 4.2 キラキラネームの狭義

全てではないが、複数の定義に共通して見られた要素が3つあった。第1の要素は、「伝統から逸脱した名前」であった。キラキラネームとするには、伝統的・一般的な名前ではなく、歴史的に新しい名前である必要がある。全ての媒体で見られた、頻度が低い名前という要素を更に説明し、どのように頻度が低い名前である必要があるかを規定している。代表例として挙げられていた、架空のキャラクターの名前や外国人名、人名には合わない単語を用いた名前は、この要素を強く反映していると考えられる。伝統的には人名としてあまり用いられなかった名前が、キラキラネームだと言える。この要素を採用する場合、現在のところ低頻度であっても、過去にはよく見られたような伝統的な名前は、キラキラネームとは言わないということになる。

第2の要素は、「読むことが難しい名前」であった。漢字が用いられた名前の場合、キラキラネームとするには、一般的・伝統的でない漢字の読み方をされるために、一見して読み方のわからない難読名である必要がある。この要素も、頻度が低い名前という要素を更に説明し、どのように頻度が低い名前である必要があるかを規定している。代表例として挙げられていた、当て字を用いた名前や特別な読み方をする名前は、この要素を強く反映していると考えられる。当て字は、漢字本来の意味とは離れた読みが与えられるために、読み方を聞くと理解できるが、初見では読み方が分かりにくいことがある。この要素を採用する場合、低頻度であっても、読むこと自体は容易な名前はキラキラネームとは言わないということになる。名前は、伝統的には読むことが難しくはなかったとするならば、読むことが難しい名前は、上述の「伝統から逸脱した名前」と捉えることもできる。

第3の要素は、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」であった。キラキラネームとするには、少なくとも否定的な文脈で用いられない名前である必要がある。この要素は、頻度が低い名前であることが与えうる影響を考慮して、どのような文脈で用いるかを規定している。頻度が低いという状態そのものには、本来肯定的なニュアンスも、否定的なニュアンスも含まれていない。頻度が低い名前が、子どもひとりひとりの個性を反映するような名前になっていたり、他の名前とは異なる印象を与えて覚えられやすい名前であったり、これまでにない良

表 3：各媒体におけるキラキラネームの代表例

	定義	1. 当て字	2. 特別な読み	3. キャラクター	4. 外国人名	5. その他
大辞林	通常の名付けの型にはまらない名前を俗にいう語。「漢字の特異な当て字によるもの」など。	「漢字の特異な当て字によるもの」	—	—	—	—
大辞泉	俗に、一般的・伝統的でない漢字の読み方 <sup>2</sup> や、人名には合わない単語を用いた <sup>3</sup> 、一風変わった名前 <sup>4</sup> のこと。名字についてはいない。どきゅんネーム。	—	「一般的・伝統的でない漢字の読み方」	—	—	「人名には合わない単語を用いた」
イミダス	当て字 <sup>1</sup> や難読漢字などを使った <sup>2</sup> 独創的な名前 <sup>3</sup> のこと。2000年代後半ごろからネット上を中心に使われ始めた呼称。名前に使用できる漢字の種類は、常用漢字と人名用漢字を合わせた2997字だが、その組み合わせ方や読みには制限がない。そのため、外来語に無理やり漢字を当てたもの <sup>1</sup> や、架空のキャラクターに由来するもの <sup>3</sup> など、一見して読み方がわからない名前を子どもにつけるケースが増えている。個性的である半面、子ども自身は名前を選べないことから、その奇抜さを批判する声もある。	「当て字」・「外来語に無理やり漢字を当てたもの」	「難読漢字などを使った」	「架空のキャラクターに由来するもの」	—	—
知恵蔵 mini (「DQNネーム」)	社会的に許容されにくい日本の子どもの名のこと。いわゆる珍名であり、「キラキラネーム」とも呼ばれる。外国人名 <sup>4</sup> 、極端な当て字 <sup>1</sup> 、大げさすぎるもの <sup>3</sup> など、奇異に感じられるものが多い。近年、DQNネームとされる名前の子が急増しており、賛否両論が巻き起こっている。	「極端な当て字」	—	—	「外国人名」	「大げさすぎるもの」
実用日本語表現辞典	近年の風潮ともいえる難読名、一風変わった名前を指す語。いわゆる珍名。どちらかと言えば肯定的な意味合いを含めて表現する場合に用いられる。否定的な、あるいは侮蔑を込めて「DQNネーム」と呼ばれる場合もある。	—	—	—	—	—
ウィキペディア	キラキラネームあるいはDQNネーム(ドキュンネーム)は、伝統的でない当て字 <sup>1</sup> や、外国人名 <sup>4</sup> やキャラクター名 <sup>3</sup> などを用いた奇抜な名前 <sup>2</sup> の総称。1990年代半ば以降から増加し、命名は親の責任であるためにその者の親の自己満足・教養の無さが露呈する名付けと言われ、2000年代にはインタネーターとしてDQNネームと呼ばれてきたが、2010年代以降にマスメディアでは批判的な意味を薄めた「キラキラネーム」が新たに造語され、以降のマスメディアではほぼ統一利用されている。	「伝統的でない当て字」	—	「キャラクター名」	「外国人名」	—

注：定義における下線と下付き文字（著者による）は、該当する代表例の記述を意味する。知恵蔵 mini では、「DQNネーム」と「キラキラネーム」を同義としてしているため、こちらに掲載した。

い印象を与えるような目立つ名前であれば、肯定的に捉えられるだろう。一方で、「伝統から逸脱した」頻度が低い名前は、「名前はこれまでの伝統に従って名づけるべきだ」と考える人にとっては、否定的に捉えられるであろう。また、「読むことが難しい」頻度が低い名前も、「名前は容易に読めるようにすべきだ」と考える人にとっては、否定的に評価されるであろう。記載が見られた2つの媒体では、キラキラネームを肯定的または中立的な文脈で用いられる名前と説明している。よって、この要素を採用する場合、否定的な文脈で用いられている場合は、キラキラネームとは呼ばないということになる。定義との一致度だけを考慮し、倫理的な観点を無視するのであれば、否定的な文脈で用いる際には、DQN ネームが使われるべきと言える。<sup>6)</sup>「名前とは～であるべき」や「名前は～なもの」といった伝統的な規範や習慣からの逸脱を、肯定的な方向または中立的に捉える場合にキラキラネームを、否定的な方向に捉える場合にDQN ネームを用いていると理解できる。

以上をまとめると、「頻度が低い名前」という広義に加えて、これら3つの構成要素を全て含めた場合の狭義は、「漢字が用いられている場合に読むことが難しく、伝統から逸脱した、頻度が低い名前で、肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」とまとめることができる。

### 4.3 限界点と今後の展望

本論文の限界点を2つ述べる。第1に、本論文はキラキラネームの定義を網羅的に検討した訳ではない。本論文には含まれていない概念を想定している定義や、本論文で扱った定義とは矛盾するような定義もあり得るかもしれない。先述の通り、定義はあくまで恣意的なものであり、無数に存在しうるため、網羅的に検討することはできない。そこで本論文は、代表的な辞典・事典に掲載されている定義を収集し、その構成要素を整理した。本論文では未検討の定義を理解する際にも、本論文は貢献すると考えられる。

第2に、ある名前が、本論文で検討した定義とその構成要素にあてはまるかどうかの判断は、個人の主観的な認知に依存する場合が多いことに注意する必要がある。例えば、ある名前に接触した際、その名前の出現頻度（例えば、ある年に生まれた全新生児の名前に占める当該の名前の割合）を正確に推定できる人はほとんどいない。頻度の認知は主観的であることが普通であり、頻度が低いと感じられるかどうかは、あくまで自分が知っている名前の集積である名前データベースに照らし合わせて判断される。そのため、個人の間で認知が共通しないことがある。例えば、新生児や幼児の名前と頻繁に接触する仕事（医者・教師・保育士など）に就いていれば、多くの名前がデータベースに含まれ、そのデータも頻繁にアップデートされており、頻度に関する推測はより正確になるであろう。一方で、そうした仕事に就いていない人にとっては、新生児や幼児の名前における頻度の正確な予測は困難である。実際、新生児の名前ランキングの上位

を占めるような頻度が高い名前に対しても、キラキラネームと言及されていることもある。また、読むことが難しいかどうか個人の主観に左右される。名前に用いられる漢字には読みの制限がなく（e.g., 荻原, 2015; Ogihara, 2021b; 2021c）、日常的な音読み・訓読みとは異なる名乗り（名前に用いる漢字の訓）もある。実際、近年人気のある表記である「大翔」には少なくとも18種類、「結愛」にも少なくとも14種類の読みが存在していた（Ogihara, 2021c; 2022b）。その他にも、伝統的な名前かどうかや、肯定的な文脈かどうかは、あくまで個人の認知に基づく。したがって、定義を共有していても、実際にキラキラネームと認知する名前には個人差が生まれる可能性がある。

### 4.4 まとめ

キラキラネームの定義は、広義には頻度が低い名前と言えるが、狭義には低頻度であることに加えて、①伝統から逸脱した名前、②（漢字が用いられている場合）読むことが難しい名前、③肯定的または中立的な文脈で用いられる名前、に限定されることがある。キラキラネームは低頻度で珍しい名前であることは広く共有されているが、それがどのように低頻度であるのか、そしてその名前が与える影響や周囲からの評価をどのように想定しているかという使用文脈については、認識が共有されている訳ではないと言える。

キラキラネームの定義が曖昧であることが、世間でも学術界においても、誤解や不十分な理解、不要な論争を招いたり、適切なコミュニケーションや生産的な議論、科学的知見の蓄積を妨げていた。そこで本論文では、キラキラネームの定義とその構成要素について、主要な辞典・事典を用いて検討した。これまで曖昧に理解され、散逸的に議論されていた概念を明確化し、共有可能な基礎的知見を提供した点で意義がある。

本論文の目的は、あくまで定義を整理して理解することであり、定義をひとつに制限して、それを強要することではない。本論文は、代表的な辞典や事典においてさえ、定義に分散があり、含まれる構成要素にも違いがあることを実際に示している。キラキラネームに関して主張や議論を行う際には、キラキラネームの定義、少なくともキラキラネームが何を意味しているのかを簡潔にでも説明してから、論を進めるべきである。その際に、代表的な辞典・事典の定義をまとめ、どのような要素によって構成されることが多いのかをまとめた本論文が役立てば幸いである。

### 注

- <sup>1)</sup> 詳細は後述するが、定義が説明されていた6つの媒体の内4つで、「キラキラネーム」と記載されていたことから（表1; 残り2つでは「きらきらネーム」）、本論文では「キラキラネーム」の表記を主に用いることとする。
- <sup>2)</sup> 言葉の定義が曖昧であることの利点もある。例えば、定義の確認や使い方の修正を逐一行う必要がないので、会話や議論が表面上は進みやすい。また、定義が曖昧



だからこそ、多くの様々な状況・場面で使用しやすい。こうした利点と、「キラキラネーム」という言葉のキャッチーさも相まって、多くの人々に用いられてきた可能性がある。

- (3) Google Scholar で検索（期間指定なし・すべての言語のページを検索・すべての種類の文献を検索・引用部分を含める・特許は含めない）を行った所、検索結果は「キラキラネーム」で 59 件、「きらきらネーム」で 2 件、「kirakira name」で 10 件のみであった（2022 年 5 月時点）。
- (4) 詳細は後述するが、定義が説明されていた 4 つの媒体の内 3 つで、「DQN ネーム」と記載されていたことから（表 1; 残りひとつは「どきゅんネーム」）、本論文では「DQN ネーム」の表記を主に用いることとする。
- (5) ただし、キラキラネームを「頻度が低い名前」という広義でのみ使用し、以下に説明しているような構成要素を付加しない場合、敢えてキラキラネームという抽象的なラベルを付けて呼ぶ必要があるのかは疑問である。「頻度が低い名前」や「珍しい名前」、「個性的な名前」、「一風変わった名前」などと直接意味を説明した方が分かりやすく、誤解を与えない。
- (6) ただし、実用日本語表現辞典とウィキペディアによれば、DQN ネームは、名づけを行った親の無教養さや自己満足を否定するような、侮蔑・軽蔑的なニュアンスがあるインターネットスラングであることに注意すべきである。

## 引用文献

- Bao, H. W., Cai, H., Jing, Y., & Wang, J. (2021). Novel evidence for the increasing prevalence of unique names in China: A reply to Ogihara. *Frontiers in Psychology*, 12, 731244.
- Cai, H., Zou, X., Feng, Y., Liu, Y., & Jing, Y. (2018). Increasing need for uniqueness in contemporary China: Empirical evidence. *Frontiers in Psychology*, 9, 554.
- 福田ますみ (2012). 「キラキラネーム」大研究 個性という呪縛. 新潮 45, 31 (7), 122-130.
- Gerhards, J. & Hackenbroch, R. (2000). Trends and causes of cultural modernization: An empirical study of first names. *International Sociology*, 15 (3), 501-531.
- 法務省 (2021). 法制審議会戸籍法部会第 1 回会議（令和 3 年 11 月 25 日開催）. <https://www.moj.go.jp/shingi1/koseki20211125.html>.
- 法務省 (2022). 法制審議会戸籍法部会第 4 回会議（令和 4 年 3 月 17 日開催）. [https://www.moj.go.jp/shingi1/koseki20220317\\_00003.html](https://www.moj.go.jp/shingi1/koseki20220317_00003.html).
- 小林康正 (2009). 名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク. 風響社.
- 松浦祐史・筒井一成 (2015). キラキラネームと ER 受診時間の関係. 小児科臨床, 68 (11), 2113-2117.
- 荻原祐二 (2015). 近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型. 人間環境学研究, 13 (2), 177-183.
- Ogihara, Y. (2020). Unique names in China: Insights from research in Japan—Commentary: Increasing need for uniqueness in contemporary China: Empirical evidence. *Frontiers in Psychology*, 11, 2136.
- Ogihara, Y. (2021a). Direct evidence of the increase in unique names in Japan: The rise of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, 2, 100056.
- Ogihara, Y. (2021b). How to read uncommon names in present-day Japan: A guide for non-native Japanese speakers. *Frontiers in Communication*, 6, 631907.
- Ogihara, Y. (2021c). I know the name well, but cannot read it correctly: Difficulties in reading recent Japanese names. *Humanities and Social Sciences Communications*, 8, 151.
- Ogihara, Y. (2022a). Common names decreased in Japan: Further evidence of an increase in individualism. *Experimental Results*, 3, e5.
- Ogihara, Y. (2022b). Further explanations for difficulties in reading recent Japanese names correctly. *Frontiers in Education*, 6, 799119.
- Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490.
- Ogihara, Y. & Ito, A. (2022). Unique names increased in Japan over 40 years: Baby names published in municipality newsletters show a rise in individualism, 1979-2018. *Current Research in Ecological and Social Psychology*, 3, 100046.
- Twenge, J. M., Abebe, E. M., & Campbell, W. K. (2010). Fitting in or standing out: Trends in American parents' choices for children's names, 1880-2007. *Social Psychological and Personality Science*, 1 (1), 19-25.
- Twenge, J. M., Dawson, L., & Campbell, W. K. (2016). Still standing out: Children's names in the United States during the Great Recession and correlations with economic indicators. *Journal of Applied Social Psychology*, 46 (11), 663-670.
- 山西良典・大泉順平・西原陽子・福本淳一 (2016). 人名の言語的特徴の分析に基づくキラキラネーム判定. 日本感性工学会論文誌, 15 (1), 31-37.

(受稿：2022 年 6 月 7 日 受理：2022 年 7 月 30 日)